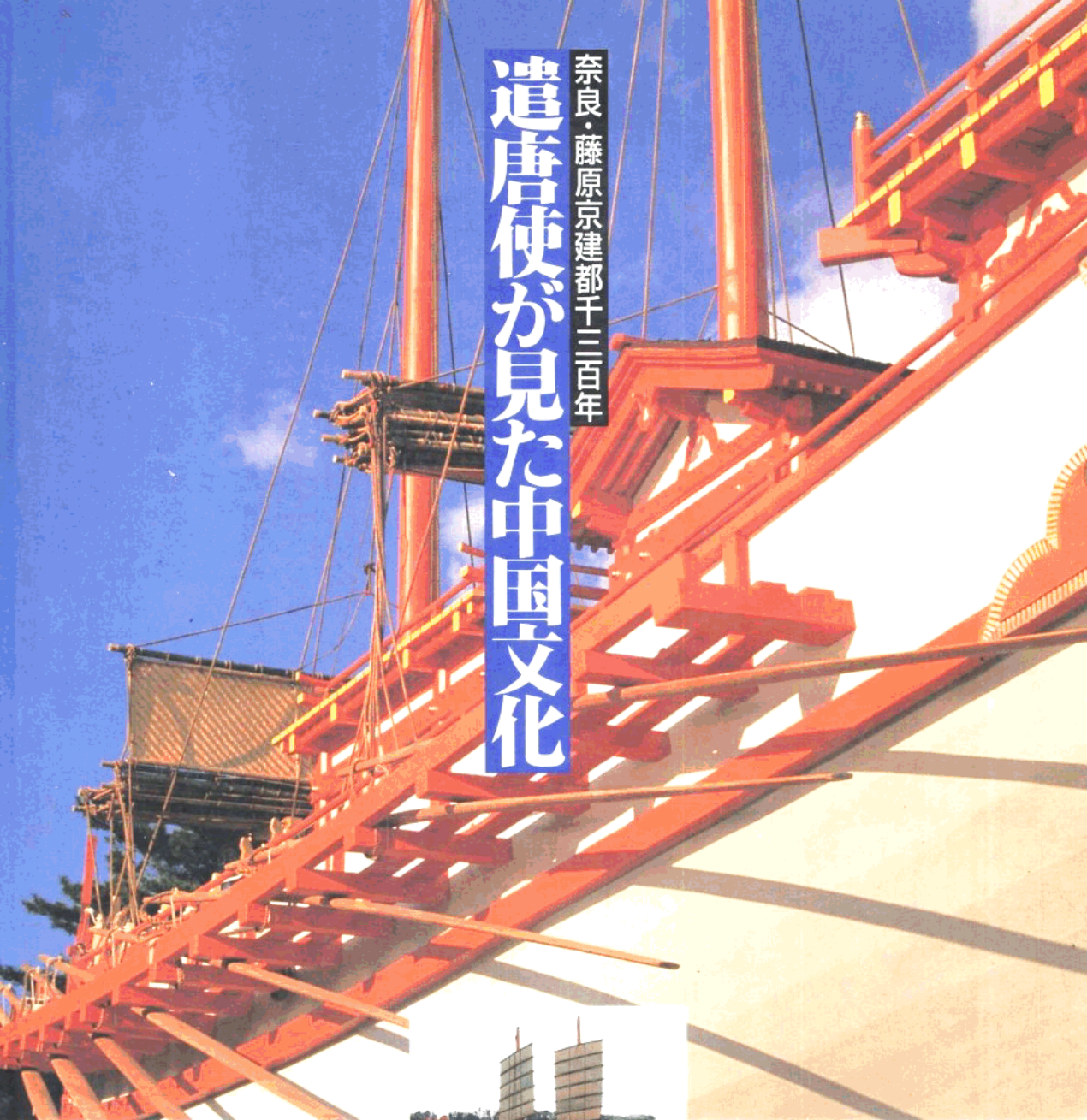


奈良・藤原京建都千三百年

遣唐使が見た中国文化



四日市市立博物館

奈良・藤原京建都千三百年

遣唐使が見た中国文化

今から1300年前、遣唐使として多大な危険をおかして、中国へ渡った多くの人々がいました。当時の中国には「唐」という巨大帝国があり、ある人は外交使節として、また、ある人は進んだ中国文明を学ぶために、さらに、ある人は仏教の教義をふかめるために、唐へ渡りました。そして、彼らが持ち帰ったものをもとに、日本では新しい国づくりをおこない、律令国家をつくりあげました。また、文化の面でもさまざまな影響を受けることとなり、遣唐使は、のちの日本文化の形成に大きな役割をはたしました。

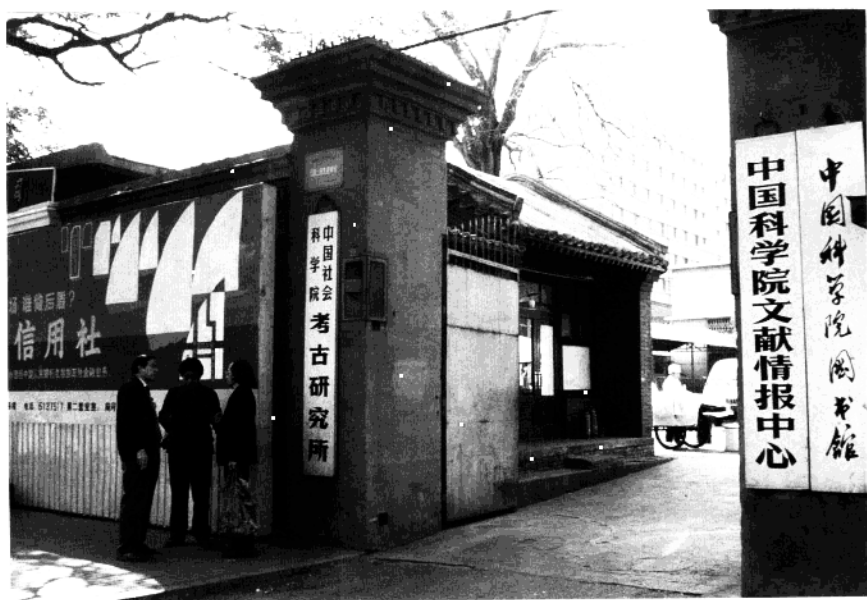
中国全土の発掘調査を組織する唯一の機関である中国社会科学院考古研究所は、1950年の創立以来、東アジア史上に著名な遺跡を数多く調査研究してきました。このたびは、その半世紀におよぶ調査成果の中から大唐帝国の都、長安や洛陽での出土文物をはじめとして、その周辺の墓地から出土した遺物を中心に展示します。長安・洛陽の壮大さや華やかさを展示品から感じていただき、遣唐使の時代に思いをはせていただければ幸いです。

なお、展覧会開催にあたり、ご協力いただいた奈良県立橿原考古学研究所附属博物館をはじめ、多くの皆様に感謝の意を表します。

平成7(1995)年9月

四日市市立博物館

中国社会科学院考古研究所



中国社会科学院考古研究所(北京)

目次

ごあいさつ

目次・例言

遣唐使が見た中国文化	樋口隆康	7
隋唐時代の考古学	劉慶柱	10
〔遺跡の概要と出土文物〕		16
〔遣唐使が見た中国文化〕		105
北魏洛陽城から隋唐長安城へ	孟凡人	107
日本都城の形成	町田章	112
遣唐使研究と吉士長丹の肖像画	東野治之	115
文物から見た仏教受容の姿ー仏教伝来から遣唐使までー	前園実知雄	118
〔参考図版〕		122
〔展示品解説〕		124
〔参考資料〕		138
〔参考文献〕		142

● 例言 ●

1. 本書は、四日市市立博物館において開催される、企画展「遣唐使が見た中国文化」展（1995年9月2日～10月10日）の展示図録である。なお今回の展覧会は、四日市市立博物館と中国社会科学院考古研究所との共同主催である。開催にあたり、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館には格別のご協力をいただきました。記して謝意を表します。
2. 本図録の展示品図版は、遺跡ごとで構成したが、これは、かならずしも展示の構成と一致していない。また、展示品番号順ではない。
3. 本図録の執筆分担、ならびに中国語原稿の翻訳の分担は、巻末に示した。
4. 本図録に収録した図版のうち、展示品の写真は、中国社会科学院考古研究所姜言忠氏の撮影による。また、発掘調査の写真、図面は、中国社会科学院考古研究所から提供を受けた。
5. 本図録の表紙写真、ならびに105、141ページの復元遣唐使船の写真、および歴史年表の航空写真は梅原章一氏の撮影による。

遣唐使が見た中国文化

樋口隆康

奈良県立橿原考古学研究所 所長

日本の古代は、常に中国・朝鮮の大陸文化の影響を受けながら生成発展してきたが、特に国家としての秩序を維持するために律令制を採用した。それは推古朝に始まる飛鳥時代から藤原京時代を経て平城京時代に至って完成したものであり、年代的には7、8世紀に当たっている。

藤原京は、その飛鳥から平城への過渡期、即ち7世紀から8世紀への移行期に条坊制を備えた最初の都城として建設された。中大兄皇子のクーデターによる蘇我氏討伐、大化の改新（645年）、そして天智から天武へ移行した壬申の乱（672年）を経て、持続・文武の藤原京時代となった。そして大宝律令（701年）の制定によって、初めて律令国家がスタートしたのである。それ以後、国名も「日本」、大王も「天皇」となった。その律令国家は先進国の唐王朝から学んだものであった。遣唐使が15回も派遣されたが、当時の人々の大陸文化に対する厚い思いが感じられる。

しかし、その遣唐使の派遣された当時の中国は一体どんな情勢であったのか、しかも、それは単に中国本土の唐王朝だけでなく、東アジア全体の情勢の中で、みておく必要があろう。

小国に分裂した南北朝を隋が併合して、中国を再統一したのは589年である。これによって隋は東アジア全体の宗主国としての自覚をもった。朝鮮半島の高句麗・百済・新羅の三国も早く隋へ朝貢し、その冊封を受けて藩国となった。倭国もまた、推古8年（600年）と推古15年（607年）と推古17年（609年）の3回、遣隋使を派遣している。ただ朝鮮の三国と違って、倭国は隋から冊封を受けるのでは

なく、対等の通交を求め、「日出るところの天子、日没するところの王に書をいたす」という国書を呈し、それが隋の不興を買ったといわれる。

その隋が高句麗討伐の失敗が原因で、618年に滅び、唐王朝となった。朝鮮三国は再び唐の冊封を受け、倭国も第1回の遣唐使を派遣した。しかし朝鮮では、唐と三国との間が複雑に交錯していた。唐が高句麗を伐ち、高句麗と百済が共同して新羅を攻め（655年）、新羅は唐の救済を求めて百済を滅ぼし（660年）、倭は百済の盟主として救援軍を送ったが、白村江の戦いで唐軍に敗れた。

第6回（669年）以後とだえていた遣唐使も再開され、唐文化の吸収による奈良朝文化の完成へと向かったのである。

戦前は、中国唐代の文化は日本の正倉院の宝物が代表とされていた。その頃の中国では唐代の文物はあまり保存されてなく、発掘もなかった。原田淑人博士によって代表される唐文化の研究も、その材料は正倉院御物が主だったのである。それが1949年、中華人民共和国が成立して、中国社会科学院考古研究所が創設された以後、開発に伴う考古調査が始まり、全国各地からあらゆる時代の遺跡や遺物が発見され始めた。長安・洛陽も例外でなく、膨大な資料が出現し始めたのである。

それらによって知られる唐文化は我々の想像をはるかに越えた豪華絢爛、しかも国際色豊かなものであった。それによって正倉院宝物も見直され、一部大陸からの渡来品以外に日本製品が意外に多いことが認識された。以後、唐代の文化は中国の出土品によって正しく研究されることとなった。



大明宮麟德殿

漢魏洛陽城・東都洛陽城・隋唐長安城は日本の古代都宮の手本になったものであり、遣隋使・遣唐使および留学生たちが実際に訪れた場所である。基本的には中国の伝統的都城制である内城外郭の構造をとっている。方形に近い外郭は城壁と濠に囲まれ、内城は中央北寄りにあり、皇帝の住む宮城はその北半に、役所のある皇城は南半を占めている。そして市街地は、即ち外郭の城内が東西南北の大街によって碁盤目に区画されて里坊を形成している。細部はともかく、基本的構造が藤原京・平城京・平安京にも採用されているのである。大明宮麟德殿では遣唐使が接待を受け、西明寺・青龍寺では空海・円仁らの留学僧が起居した。

今回の出陳品は学術発掘によって得られたものだけに、隋唐時代の文物を直接みせてくれるばかりでなく、それらのダイナミックな変遷を跡づけることができる。

例えば陶磁器である。中国陶磁の特色は高温で焼かれた硬質磁器である。これは高温のだせる陶窯や良質の陶土が中国に産するところに原因があり、西方世界では真似のできない点である。既に新石器時代の印紋硬陶や殷周代の灰釉陶があったが、漢代には軟陶系の緑釉陶が盛行した。魏晉六朝代には華南系の青磁が主体であった。河南省偃師杏園魏晉墓から出土した青釉人物磁瓶や洛陽大市出土の青磁碗などが、その例である。隋代になって華北邢州窯産の白磁が現れた。西安大明宮出土の「盈」の字を刻した白磁碗は、帝王が日常使用した愛器の一つとみなされている。「盈」とは皇帝の私庫の名である。

唐代陶磁の代表とされる三彩は、もともと西アジアが起源であろうが、中国では初唐代に作られ始め、則天武后の時代から8世紀前半までを最盛期とした。特に西安・洛陽の出土物に優品が多い。三彩陶磁はもともと副葬用の明器として作られたので、容器だけでなく大型の陶俑もあり、バラエティーに富んでいる。

当時の銅鏡は漢式鏡とは違った時代と特徴をもつものとして、唐鏡と呼ばれている。漢式鏡は三国・晋代までは盛行したが、南北朝時代には急速に衰退し、僅かに鉄鏡が作られていた。そして隋代になって再び銅鏡が息を吹き返して盛んに作られ始めた。それは全く新しいスタイルを産み出したのである。鏡体は白銅質で、やや厚く、鏡面には反りがなくて平直である。そして鏡背は漢式鏡に多くあった圈帯が少なくなり、広い画面に大きな図柄を施すようになった。それは漢式鏡の主題であった神仙思想図ではなく、自然を題材とした花鳥画風のものや、西方伝来の図案が多くなったのである。今回出陳されている偃師杏園の唐墓群をはじめとする各地の唐墓は、墓誌によって埋葬の時期が解り、出土鏡の編年に役立っている。

銘帯瑞獸文鏡は漢式鏡の名残である銘帯をもっており、その銘文も隋鏡に近いところから、隋末唐初作とみなしていいであろう。唐鏡のうちで比較的早く出現するのは海獸葡萄鏡である。高宗初年に現れ始め、武則天時代に最も流行した。陝西省礼泉県の龍朔三年(663年)墓出土鏡、麟德二年(665年)墓出土鏡などがある。双鸞双瑞獸鏡は中宗神龍三年墓出土鏡が最古の例であり、八稜鏡としても古い例である。雲龍文鏡も新しいデザインである。偃師杏園の李景由墓(738年)出土の雲龍文鏡、広東省韶関張九齡墓(741年)出土の雲龍文鏡、河南省陝縣至徳元年(756年)墓出土の螺鈿雲龍文鏡があり、玄宗から徳宗まで流行の時代であったようであるとすれば、杏園出土鏡はこの種の鏡として最も早い例といえる。

唐代には青銅の鏡胎の背面に貼銀・金銀平脱・螺鈿などにカラフルな文様を施す、いわゆる宝飾背鏡が出現した。貼銀鍍金鏡は銀板に打ち出して図文をあらわし、主文に金メッキを施して、それを鏡背面に貼りつけたものである。青銅一色でなく色彩的に華やかさを加えている。貼銀鏡の



大明宮麟德殿

早い例としては洛陽邙山出土と伝えられている両圈瑞獸文鏡（白鶴美術館蔵）がある。（梅原末治『唐鏡大鑑』九二）。二つの圈帯に獸文を巡らし、その外に銘帯があって「練形神治」の銘があり、隋鏡である。更に長寿元年銘狻猊飛禽文八棱鏡（梅原末治『唐鏡大鑑』九九の下）は貼銀板に隠れているが、鏡体に鈕を繞って陽文で次の銘があるという。「唐長寿元年臘月頭七日造」、長寿元年は則天武后の692年に当たり、臘月は陰曆12月である。偃師杏園宋墳墓出土の六棱鏡は小型の貼銀四禽獸文鏡であるが、出土の墓が神龍二年（706年）の造宮であるので則天武后の時代、即ち初唐末に作られたものである。同じ偃師杏園の李景由墓は玄宗の開元二十六年（738年）の造立であるが、そこから出土の鏡も宋墳墓出土鏡に極似た小型の貼銀四禽獸文六棱鏡である。従って貼銀鏡は七世紀から八世紀後半まで行われたとみることができる。偃師杏園の李景由墓から鍍金銀器3点が出土している。六角形盒、蛤形盒と九曲勺である。貼銀鏡の手法と密接な関係があるものと思われる。

金銀平脱鏡もまた唐代新出の宝飾背鏡である。洛陽閔林

天宝九年（750年）墓出土の花鳥文八花鏡（考古80の4）が古い例である。偃師大曆十三年（778年）の鄭洵墓（考古87の12）出土の花鳥鏡などがあるから八世紀後半に作られたことは確かである。金銀平脱は鏡以外の漆箱などにもあり、唐代末まで行われたことが推測される。

螺鈿鏡も宝飾背鏡の一つである。紀年銘墓出土例としては、河南省陝県M一九一四墓は至徳元年（756年）の造墓があるが、そこから大型の盤龍文鏡が出ている（通訳1958の11）。また洛陽澗西の乾元二年（759年）墓や洛陽十六工区興元元年（784年）墓（文参1956の5）からは高士宴楽図の鏡（洛陽出土銅鏡）が出ており、貞元十四年（798年）の墓誌のある西安郭家灘M四一九号墓（陝西省出土銅鏡126）からも高士宴楽鏡が出ている。いずれも八世紀後半である。

同じ時代の正倉院にも各種の宝飾背鏡があるが、特に螺鈿鏡では単に貝殻片だけでなく、トルコ石・ラピスラズリ・琥珀なども使われており、多彩で一層の華麗さを増している。

中国新出土の唐代文物と較べることによって、正倉院宝物の真価が確かめられたとも云えるのである。



大明宮麟德殿



大明宮麟德殿 磚出土状況

隋唐時代の考古学

● 最近の発掘成果から

劉 慶 柱

中国社会科学院考古研究所 研究員

隋唐時代は中国古代史上の繁栄期であった。ふたつの都である長安と洛陽は隋唐帝国の政治、経済、文化の中枢であり、当時の世界における代表的な国際都市であると同時に、中日文化交流史の主要な舞台でもあった。したがって、今回の展覧会も西安と洛陽における隋唐時代の考古学的研究成果をその内容の核とするわけである。

中国社会科学院考古研究所では1950年代から隋唐兩京—長安と洛陽の考古学の調査研究を開始し、注目に値する考古学の発見をおこなった。近年の調査研究でも注目すべき成果を得ている。

■西京長安における最近の調査成果

隋の大興城、唐の長安城は現在の西安市に位置する。この都は隋開皇二年（582年）に創建され、隋では「大興」と称し、唐が「長安」と改名した。近年の隋唐長安城における主な考古学の調査として、皇城の城門である含光門、大明宮の宮門と宮殿建築址、および外郭城の里坊と寺院址の発掘がある。また、そのほかに隋の仁寿宮、唐の九成宮の調査がある。

■含光門の調査

含光門は唐長安城の皇城城門としてはこれまでに唯一発掘調査がおこなわれたものである。この門は皇城の南面西側の城門である。門址の平面は長方形を呈し、3つの門道がある。それぞれの門道の両側には東西対称に規則正しく配列された礎石15個があり、その上に柱が建てられていた。門道の構造は木材を用いて架構した城門である。含光門の

発掘によって、私たちは唐長安城皇城の構造についての理解をいちだんと深めることができた。

■大明宮の調査

大明宮は、高宗の龍朔二年（662年）から唐王朝が全国に政令を発する宮城、すなわち都城長安の政治の中枢となった。1980年代以来、大明宮の含耀門、清思殿、三清殿、翰林院、東朝堂などの重要な建築址の発掘調査をおこなった。

1987年に発掘調査した含耀門は大明宮内の宮門である。この門は含元殿の東側、2番目の宮壁のなかほどに位置し、北は崇明門、南は昭訓門に相対し、さらに南は大明宮外に通じる主要な宮門のひとつである望仙門に相対している。門址の平面は東西26.4m、南北12.5mの長方形を呈する。2つある門道は木材で架構した形式に属し、門の上部には築地門楼建築があった。門址の南面、門土台両端から外側へそれぞれ6.7mの位置に東西に並列して南にのびる壁がある。壁の厚さは4.5mである。二つの築地壁の間隔は39.9mで、南は昭訓門に達する「甬道」を形成し、宮廷門禁の厳重さを物語っている。

清思殿は唐の敬宗が建てたもので、大明宮内で皇帝の起居、遊樂に供した便殿建築である。左銀台門の内側西北280m余に位置する。殿址の基壇は東西33m、南北28.8mのほぼ方形をなし、殿堂は間口7間、奥行き5間である。殿の北には東西対称に並列して磚2枚ずつを積んだ階段がある。殿の南は庭院である。

唐の宗室李氏はみづから道教の祖師李耳の後裔と称していたことから、宮廷内に道教を奉祀するための三清殿を建

てた。三清殿は大明宮の北城青霄門内東側にある高台建築である。基壇はきわめて大規模で、平面は南北73m、東西47mの長方形をなし、唐代の地面からの高さは14mある。基壇の上部には「廡殿樓閣」を建てる。高台は版築で築き、磚積みで化粧する。殿に登るための階段は2つある。ひとつは台基の南端中央にあって、長さ14.7mの階段である。いまひとつは台基の西側北端にあって、長さ44.3mのおそらく緩やかな斜道すなわち「龍尾道」であろう。高台の東側には庭院式建築址があり、三清殿の附属施設と考えられる。三清殿址からは発掘によって多量の施釉瓦が出土している。黄、緑、藍の単彩釉瓦のほか、きわめて大量の黄・緑・藍三色の「三彩瓦」がある。大明宮内のひとつの建築址からこれほど大量の施釉瓦が出土した例はほかにはない。出土した方磚には、蓮華文磚は少なく、海獸葡萄文と葡萄鹿文磚が多い。後者はやはり大明宮では初見のものである。

含元殿は大明宮の正殿で、百官は入朝してまず含元殿の翔鸞閣、棲鳳閣の南30mにある東・西朝堂へ行き、朝見を待たなければならない。1982年、その東朝堂址を発掘調査した。建物は2時期あり、前期のものは南向きの長細い大型建物である。基址平面は東西73m、南北12.45m、間口15間、奥行き2間である。基址の南辺には3ヶ所の階段が

ある。基址の東には東西方向の壁があり、その東端は含耀門街の西側南北方向の壁とつながっている。後期の建物は前期建物の基址上に重複して建てられたもので、その基址は東西68m、南北16m、間口13間、奥行き3間の規模をもつ。基址の南辺には2ヶ所の階段がある。基址の東端と北辺西端にはそれぞれ東、北へのびる回廊が取り付けられている。

翰林院は国の政治に参与し、「内相」の称をもつ翰林学士の事務機構である。大明宮翰林院は大明宮右銀台門以北の西夾城内にあり、南北400m、東西50mある。翰林院南院の5基の建物址についてすでに発掘調査が行われている。その中には文献に見える学士院「南庁五間」や翰林院「北庁五間」が含まれている。

■唐長安城安定坊の調査

1987年試掘調査と発掘調査を実施した唐長安城安定坊内の街路区画は「大きな十字」形の街路で区画された4分の1区をさらにそれぞれ「小さな十字」形の路地で分けたものであった。街路の幅は20m、路地の幅は5～6mで、これらによって1つの坊は16の小区に分けられることになる。日本の平城京の1坊16町制も唐長安城の坊制を模倣したものである可能性がある。



西明寺 全景

■青龍寺の調査

唐代はわが国における仏教発展の絶頂期であり、長安は当時全国の仏教の中心でもあった。近年青龍寺址と西明寺址について大規模な発掘調査が行われ、長安の寺院に関する大量の考古資料を提供している。

青龍寺は長安城の新昌坊にあった大寺院で、5～6ヶ所の院をもつ。これまでに発掘調査されたふたつの院では、中に仏殿、塔、回廊などの遺構があり、仏像、経幢などの仏教遺物が出土している。青龍寺は盛唐以降、長安における密宗の大道場となり、密教の研究・普及の中心であった。青龍寺と日本の仏教とは深いかかわりがあり、日本から入唐した空海、円仁、円珍、宗叡ら著名な僧侶はいずれも青龍寺を訪れている。

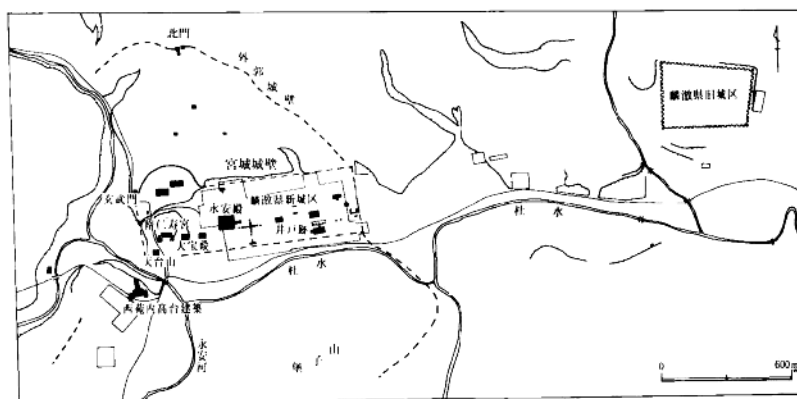
■西明寺の調査

西明寺は長安城にあった4ヶ所の「国家大寺」の一つである。文献によると西明寺には「大殿十三所、楼台廊廡四千区」があり、「その荘厳さは梁の同泰寺、魏の永寧寺といえども及ぶべくもない」と記されている。西明寺の寺域は東西500m、南北200mの規模をもつ。1985年と1992年の

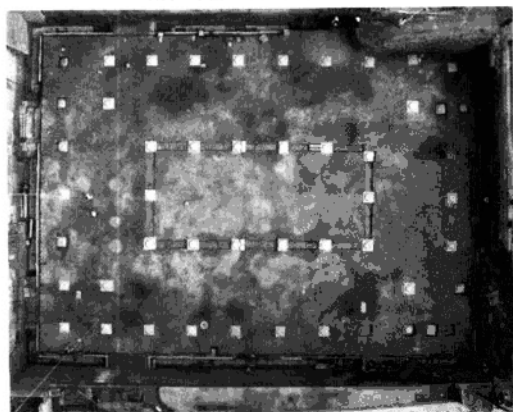
2回、西明寺の発掘調査をおこなった。14,000㎡あまりの発掘区の中で、前後3部分にからなる完全な院の遺構を検出した。前殿は前序、中院は主殿となるもので、殿堂の東、西、南3面には回廊がある。後院は講堂または経堂で、西側は僧房である。この遺構が文献に記された西明寺「十院」中の一院であることはまちがいない。これまでに発掘された建物遺構からみて、その殿址、庭院、回廊などは綿密に配置され、溜井、井戸、下水道、集水穴などの給排水施設が完備しており、唐代寺院が庭院を単位とした建物構成をもっていたことを反映している。西明寺は中日文化交流史の上で重要な役割を果たした。日本の学問僧と西明寺との関係はきわめて深いものである。少なからぬ数の学問僧、たとえば永忠、空海、円珍、円載、真如、宗叡らはみな西明寺で過ごしたことがある。天平元年（729年）に建立された平城京の大安寺は、日本人僧道慈がもたらした長安西明寺の図面をもとに建てられたものである。

■隋仁寿宮・唐九成宮の調査

隋仁寿宮・唐九成宮の調査・発掘は近年の隋唐考古学が新たに獲得した重要な成果の一つである。この宮殿は隋開



隋仁寿宮・唐九成宮 平面図



隋仁寿宮・唐九成宮 37号宮殿全景

皇十三年に建てられたもので、隋文帝、唐太宗、唐高宗の避暑のための離宮である。現在の西安の北西163km、麟游県に位置する。中国社会科学院考古研究所では1978年以来、この宮殿遺跡について15年におよぶ考古学的調査を実施しており、現在までにその範囲と遺構の配置をほぼ明らかにしている。宮城には内外二重の城壁がある。内城は東西1010m、南北300mあり、北門一玄武門についてすでに試掘調査を実施した。外郭城は山の稜線に沿って城壁が築かれ、北門址を発掘調査した。宮城内には多くの宮殿があり、楼閣が林立していた。そのうち5ヶ所の宮殿址をボーリング調査あるいは発掘調査した。1994年に発掘が終了した37号宮殿址は保存がもっとも良好で、規模も大きなものであ

る。37号宮殿址は宮城中央東寄りにあり、南面する。基壇は東西42.62m、南北31.72m、間口9間、奥行6間の規模をもつ。四壁はすべて石積みで、表面に精美な文様を彫刻している。基壇の南壁には「左右階」を備え、それぞれ3道ある。基壇の上部には現在46個の1m四方の青石の礎石がみられる。その配列は明瞭で、柱の分布は独特である。この宮殿址の保存の良好なことと工芸技術の精緻なことは、隋唐時代の考古学上きわめてまれにみるものである。この一回の発掘で、中国建築史上における隋代建築の空白を埋め、隋代建築の技術水準の高さ、見事さが明らかにされたのである。

②東都洛陽の考古学的調査と発掘

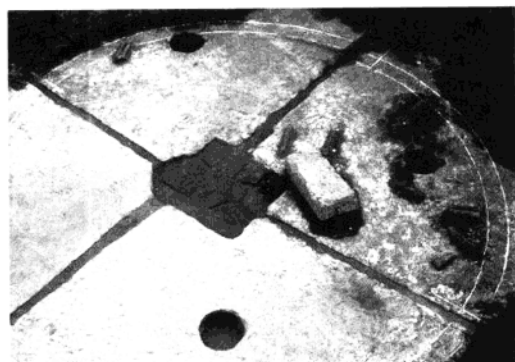
東都洛陽城は隋の煬帝が大業元年（605年）に漢魏洛陽城の西南に新たに造営したものである。唐は初め東都を廢し、洛州都督府としたが、高宗の顯慶二年（657年）以後、洛陽を東都に復した。近年の洛陽城における主な考古学的調査成果としては、宮城正門—応天門東闕址、則天武后の明堂址、九洲池址の発掘、唐代の大詩人白居易邸宅跡の発掘および偃師杏園唐墓の発掘調査がある。

■応天門の調査

応天門址は1960年代に中国社会科学院考古研究所による試掘調査によって確定され、1980年に洛陽市文物工作隊が応天門西闕址にトレンチを入れて試掘をおこなっている。



洛陽城 應天門跡



洛陽城 武則天明堂遺跡

応天門の形態、構造をいっそう明らかにするため、1990年考古研究所が東闕址を全面発掘した。発掘範囲は門址の土台の一部、門東側の雑楼、闕楼と門・雑楼、雑楼と闕楼の間に取り付く回廊を含む。発掘をおこなった東闕址とこれに対応する西闕址を検討すると、これらは一組の門楼、雑楼、闕楼、さらにそれぞれの間の回廊が一体となった巨大な建築群であり、壮大な隋唐都城建築の風格を十分に表している。この発掘は中国建築史上の空白部分に隋唐時代の宮闕門址の建物構造をつけ加えることになった。

■宮城門の調査

このほか、近年宮城の明德門、洛城西門、宣政門が試掘

によって確認され、崇慶門を発掘調査している。東宮の重光北門、陶光園南門と圓豐城東門もまた試掘によって明らかになっている。上述の諸門は、明徳門が3つの門道をもつ以外すべて門道は1つである。

■明堂遺跡の調査

1986年に発掘した明堂は、則天武后が垂拱四年（688年）に乾元殿を取り壊して建造した重要な建物で、応天門内の宮城中軸線上に位置する。明堂の版築土台は東西54.7m、南北45.7m、平面八角形を呈する。土台の中心で円形の大形柱穴1個を検出した。穴の底には4個の大きな青石で構成された巨大な礎石がある。明堂は伝統的な高層木造建築技術を採用し、心柱を主体とし、層ごとに支柱を設け、梁、桁、斗拱などの部材を通じてひとつの頑丈な構造を形成している。明堂完成後、則天武后はほとんどすべての重要な活動をここでおこない、明堂を武后政權の象徴とした。明堂址はこれまでの洛陽隋唐東都の考古学上もっとも重要な発見であり、それは東都の宮殿の形態、構造、規模および建物の構造の研究に重要な資料を提供した。すなわち、宮城内の宮殿の配置の検討、復元をさらに進めるための適切な指標となった。

■九洲池の調査

九洲池は宮城内の御苑で、ボーリング調査と発掘によってすでにその位置、範囲、構造を確認しつつある。九洲池は宮城の西北隅にあって、池の平面形は東西205m、南北130mの不規則な楕円形をなし、池の深さは3.6mである。九洲池内では試掘調査によって中島5ヶ所を確認している。島の平面形は円形または楕円形である。円形の場合は直径約30m、楕円形の場合は長径40～50m、短径23～35mを測る。3つの中島の上では各1ヶ所ずつの殿亭址を発見している。さらに九洲池の西南部では池に面して建てられた回廊を発掘している。

この数年間に洛陽宮城で発見された遺物の中で、1989年に応天門内で出土した唐哀帝即位玉冊をその重要性においてしのぐものはないであろう。これは考古学上初めて発見された唐代皇帝の即位冊文であり、唐代皇帝の即位玉冊の形態や構造、それにかかわる礼制制度を理解するための実物資料である。このほか、1991年に東城中部で発掘した唐代の2基の瓦磚を焼成した官窯もまたここでの新発見に属する。

■唐白居易邸宅跡の調査

1992年から1993年にかけて唐洛陽城の履道坊に対する考古学的調査がおこなわれた。これは目下のところ隋唐両京

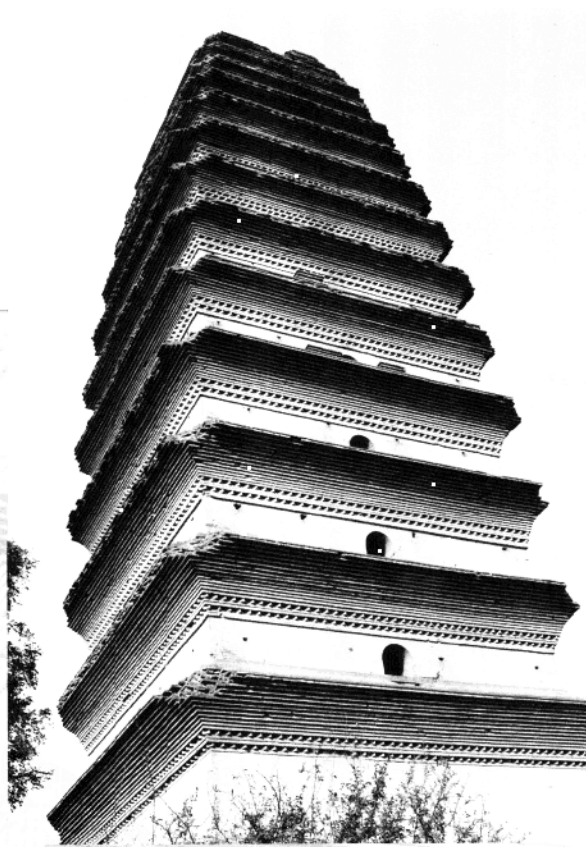
の里坊に対する最初の大規模発掘である。しかも履道坊は唐代の大詩人白居易の故居が所在した場所であり、その発掘の意義はいっそう重要なものとなった。履道坊は現在の洛陽市郊区、安東郷獅子橋村にある。今回の発掘面積は7249㎡で、白居易邸宅の居住区および南部の庭園―「南園」もその範囲に含まれる。さらに履道坊の西側では東西に平行する2条の水路とその間にはさまれた坊間大道を発掘によって検出している。邸宅の居住区址には「中厅」がある。「中厅」は平面方形をなし、東西5.5m、南北5.8mの規模をもつ。その東西両端には回廊が取り付け、東西の「廂房」につながっている。東西の「廂房」から北に向かってまたそれぞれ回廊があり、「上房」につながっている。中庭の南は「門房」になる。このことから、白居易邸宅は南に「門房」、北に「上房」、中央に「中厅」を配置していることが知られ、前後に庭院を有する構造の「兩進式」の院であったといえる。邸宅から出土した遺物はきわめて豊富である。大量の建築部材類を除くと、陶磁器がもっとも多い。なかでも石製、磁器の硯、大量の酒器、茶器などの遺物は、詩人が座って筆耕にはげみ、あるいは酒を嗜み、茶を飲んでいる暮らしの情景を生き生きと蘇らせてくれる。石製経幢の出土は、晩年の白居易があつく仏教を信仰していたことを反映しているのであろう。履道坊の発掘調査によって、白居易故居の位置が確定されたとともに、その邸宅の規模と配置の形態、構造をおおむね明らかにすることができた。

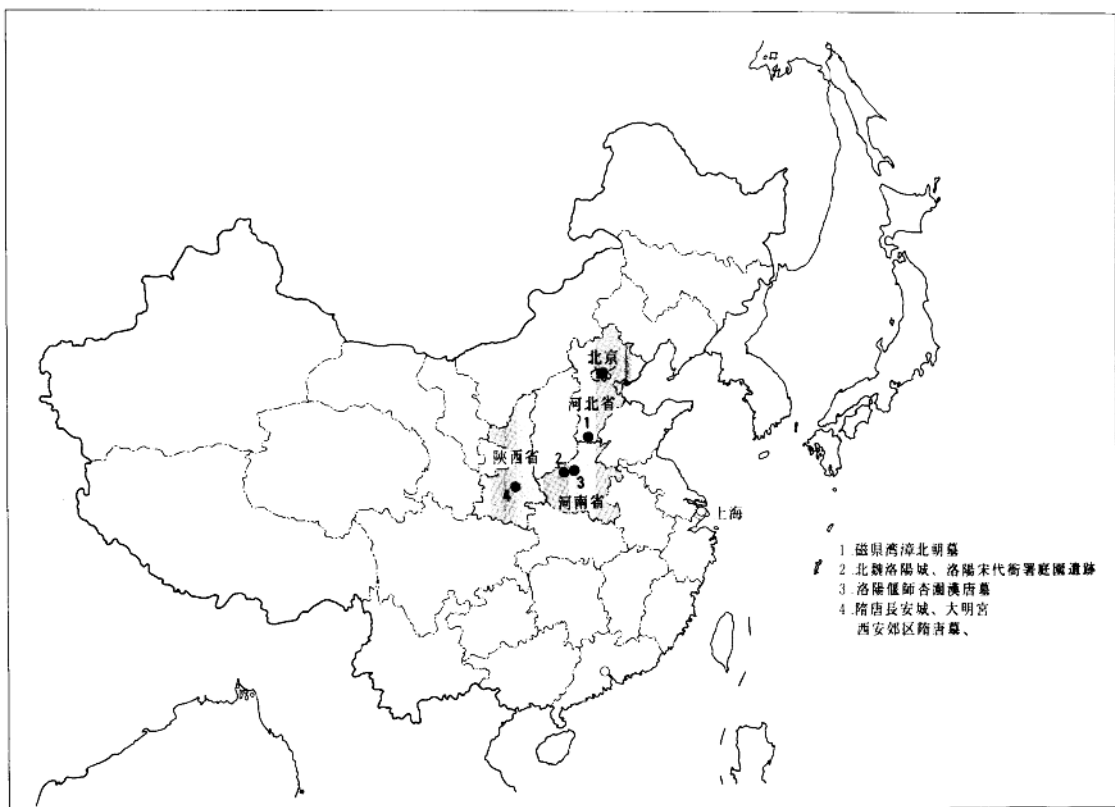
■洛陽偃師杏園唐墓の調査

隋唐東都洛陽城の都城遺跡に対して大規模な発掘調査を実施するいっぽう、唐東都の物質文化をよりいっそう理解するために、1980年代半ばに洛陽東郊の偃師県杏園唐墓の発掘調査を実施した。全部で60基の唐墓を調査したが、その中には紀年墓32基を含み、40合の墓誌が出土した。これらの唐墓は694年から881年におよぶ、ある中小官吏一族の墓地である。出土遺物は豊富で、鍍金銀製鈿、銀製盒、銀製箸、刻花鍍金小形金銀器、精緻な彫刻を施した滑石器、金銀平脱漆器、すぐれた青銅器、精良な白磁などがある。そのうち各種の茶器は唐代の茶道、茶文化さらには中日文化交流を研究するうえでの新たな材料である。

これまで述べた隋唐時代の長安と洛陽の考古学的調査成果は、今回の展覧会に十分反映されている。これが中日文化交流史に対する理解をさらに深める一助となることを信じてやまない。

遺跡の概要と
出土文物





展覧会にかかわる遺跡分布図

〔遺跡の概要と出土文物〕 目次

磁県漳北朝墓

北魏洛陽城

北魏洛陽城1号建物

北魏洛陽城大市

北魏永寧寺

河南偃師杏園漢唐墓

西安郊區隋唐墓

隋唐洛陽城

洛陽白居易邸宅跡

隋唐長安城

大明宮

西明寺

青龍寺

洛陽宋代衙署庭園遺跡